チーム「H」

白カカオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チーム「Ｈ」

【Ｎコード】
Ｎ８３５５Ｔ

【作者名】
白カカオ

【あらすじ】
東京都立川市。西東京屈指の歓楽街を有するこの街に、北村博文は住んでいた。高校からずっとつるんでいる、「堀江一」「中島平太」そして彼女の「藤澤春花」。毎週末に集まるこの三人さえいれば、四人の世界は完璧だった。そう、誰一人として欠けなければ…。

あるコンビニ店員の話（前書き）

作者の白カカオです。「クリエーター」を愛読してくれている方も、はじめましての方も、お楽しみいただければ幸いです。こっちは青春群像を描いていくつもりなので、また違ったテイストでお楽しみいただけたら幸いです。実在の地名等出てきますが、団体名や企業名は基本的にフィクションで構成します。不定期連載になると思いますが、温かく見守ってください。

あるコンビニ店員の話

「いらっしゃいませこんばんわー」

皆さんはじめまして。北村博文です。今僕はモノレールの駅沿いのコンビニで夜勤中です。年齢は二十三歳。大学を卒業してから就職もせずフリーターをしています。別に就職難に巻き込まれたわけではないですよ。大学時代に芽生えた夢を追いかけるため、こんな事をしているのです。その夢は…小説家です。なんかこう告白すると恥ずかしいですね。

今日は木曜日。平日の深夜なのですが、近くに飲み屋があったり、漫画喫茶があったり、カラオケがあったり、ここが学生が多く住む地域であったり、商業都市であったり…つまりは、割と混んでいます。ここでアルバイトを始めて半年足らず。僕もやっとこの仕事に慣れてきました。今は相方が納品された品物を検品して、陳列しています。客足が引かず、少し遣りづらそうです。僕はレジ周りを任されているのですが、こっちも頻繁にお客さんがくるのでなかなかはかどりません。今日の休憩は短くなってしまうかもしれません。

でも、今日はそれでもいいんです。明日は金曜日。夜には僕のアパートにみんなで集まって、週に一回の僕の楽しみが待っているから。

みんなとは、堀江一と中島平太…そして僕の彼女、藤澤春花の三人。高校二年生の春からずっと一緒にいる、僕の大切な仲間達です。帰宅部だった僕にハジメが声をかけてきてくれたことがきっかけで、ヘイタと春花がいつの間にか輪に入り、放課後自然と集まるようになった四人です。気がつけばもう七年目。こんなにずっと続くとは思ってなかったので、僕も驚いています。僕の大切な仲間を皆さん

に知ってもらいたいので、勝手ですが紹介させてください。

先ずはハジメ。すらっと高い身長と顔もかっこいい部類。男の僕が言うのもなんですが、本当にかっこいいんです。それに、運動神経も抜群。成績は…僕とあまり変わらないけど。でもどこか要領が良くて飄々としてて…このクラスの中心人物です。悔しいけど、僕とは正反対な人です。

「なぁ北村。放課後って暇？ちょっと付き合わない？」

これが僕とハジメがつるむようになったきっかけでした。

その日、ハジメはレンタルショップに行きたかったんですが、一緒に行く連れが欲しかったようです。

「でも、なんで僕なの？堀江君なら他にもっと一緒に行く人いたでしょ？僕とは、そんなに話したことないのに」

お店に行く途中、思い切って聞いてみました。ちょっと勇気出して。すると、ハジメは不思議そうに答えてくれました。

「だって、クラスメイトじゃん俺ら。一緒に遊ぶのって、普通じゃない？それに、前からお前とちゃんと話してみたかったんよ。ほら、お前いつも読んでる本。あの作者…あー、何て名前だっけ？」

「黒田正平？」

「そうそう。こないだ公開したさ、水平線の彼方。あの映画、俺的に凄ぇ面白くてさ。原作者のとこ、なんか見たことある名前だなぁって思ったら、いっつもお前読んでる本の作者じゃん。そりゃもう話しかけるしかないじゃん」

ハジメはよくしゃべります。そしてこの時のコロコロと変わる表情が印象的でした。

「あー、あとさ。俺の事ハジメでいいよ。他の連中もそう呼んでるし、俺もお前のこと、あだ名で呼ぶから」

こうして、僕達はよくつるむようになりました。

次に、ヘイタ。ヘイタも、仲良くなるきっかけはハジメでした。

ハジメが出たい出たいと言っていた、街の夏祭りのスリーオンスリー。ハジメはもう僕と出ることは決定していたようなのですが、もう一人メンバーが足りませんでした。そこで次の授業の予習をしていたヘイタに声をかけたのです。本音を言うと、僕は誰とも仲良くなろうとせず、それでいつも気難しそうな顔をしているヘイタが少し苦手だったんですけど。

「なぁヘイタ。お前今週の祭、行く？」

「あぁ」

「一人でだろ？」

「…お前、喧嘩売りにきたのか？」

僕は少し離れた所で、二人のやりとりを見ていました。

「違う違う。バスケのあれ。出たいんだけど面子足りなくてさ。頼む、一緒に入ってくれ」

ハジメが手を合わせてヘイタに頼み込みます。ヘイタは、ちょっと困った顔をしましたが、すぐに了承してくれました。

「まぁ、いいよ。それぐらいなら。もう一人は誰よ？」

「ヒロ。俺は何でも完璧に出来るけどさ、ヒロが運動駄目駄目だから。お前が入ってくれるなら心強い」

「ふぅん。北村ね」

一瞥された時はちょっと緊張したけど、結局祭の日は三人で楽しく過ごしました。ヘイタは中学で野球部に入ってたので、運動はクラスでも出来る方です。スリーオンスリーも一回戦はほとんど二人で勝ってしまいました。人数合わせはどっちだったか。次の二回戦は、現役バスケ部チームに当たって負けちゃいましたが。その日は公民館裏で、こっそり買ってきたお酒で三人で打ち上げして、いつの間にかヒロ、ヘイタと呼び合うようになっていました。聞いたところ両親が凄く厳しい人で、大学受験第一にさせられていた為に休み時間も勉強に費やし、誰とも仲良くならなかっただけなんだそうです。やっとヘイタが笑ってくれて、なんだか嬉しくなったのを今でも覚えています。

最後に…春花。こうして改まって言うのも恥ずかしいんですけど、僕の彼女です。
春花は、春花から声をかけて来て僕らのグループに入ってきました。
「あんた達カラオケ行くの？うちも混ぜてよ」
僕の春花の第一印象は、明るい子だなぁと、それと派手な子だなぁの二つ。たぶん薄化粧ではあるけど目元はぱっちりで、茶髪で制服を着崩していたから。これは後でわかったことですけど、化粧はファンデーション位で、大きな目と長い睫毛はいじってないそうです。
「うちは元がいいからねぇ。ねぇヒロ、嬉しい？こんな可愛い女の子が彼女で、嬉しい？」
今でもたまにこんなやりとりをしますが、僕は寧ろ耳を真っ赤にして本当は恥ずかしがってるところが可愛いと思ってます。すみません、少し惚気ました。
告白は、春花の方からでした。僕はとても、女の子に告白する勇気なんてありません。へたれです。その日、夕食前にみんなと別れた後、春花からメールが来ました。
「八時ころ、北口のモノレール下の公園に来れない？」
僕は何の気なしに了承すると、ご飯を食べて公園に向かいました。
「はい、これ」
途中のコンビニで買った、温かい紅茶を春花に渡すと、ベンチに座った春花はほっとした顔で僕を見上げました。十一月の夜間は、やっぱり寒かったです。
「ねぇヒロ…驚かないで聞いてね？」
春花の重い口調に、僕も思わず真剣な面持ちになります。
「うん…」
「うちね、好きな人がいるんだ」
「そう…なんだ」

そのとき思ったのが二つ。一つは春花がその人に振られて落ち込んでしまっているという状況。もう一つは、好きになった相手が、ハジメ君であるという状況。後者なら、応援してあげたいと思いました。飄々としたハジメに、いつも明るい春花。はっきり言って、お似合いだと思います。大好きな二人がくっつくなら、こんなに幸せなことはないと思いました。

「誰か…聞かないの？」

「じゃあ、教えてくれる？」

「…ロ」

「えっ？」

「ヒロ」

「そっか、ヒロか…えっ？ヒロって、僕？」

「うちが言う、ヒロに他に誰がいるのよ」

人間、想定外の出来事ってすぐに認識出来るように出来てないんだと気づきました。春花が外国語をしゃべっているかのようで頭で理解出来ずに、でも別の僕は、この状況で、春花はこんな調子で、つまりはそういう事なんだと理解していて。心拍数が跳ね上がって気持ち悪くなったのを覚えてます。後に春花にそれを言ったら、超失礼って笑いながら叩かれましたが。

「なんで…何で僕を？ハジメじゃなくて？」

「あんたそれ、失礼。うちは、ヒロがいいの。素直で優しくて、犬っぽくて可愛くて、それでいてちゃんと男の子で。そんなヒロが好きになったの」

「待って、途中で失礼なこと言わなかった？」

「あははは。…ヒロ、好きです。うちでよかったら、付き合ってください…」

途中で、春花の言葉が震えているのがわかりました。そんな、明るい春花が不安そうな表情で見ているのがわかったら、僕に拒む理由はありません。もともと可愛いとは思っていましたが。

「ずるいよ、春花」

「えっ？」
「春花にそんな顔されたら、守ってあげたくなっちゃうじゃん」
「…ヒロッ」
春花の顔が華を咲かせ、抱きついてきました。女の子とそういうことになったことがない僕は、心臓の鼓動が聞こえるんじゃないかってくらい緊張していましたが。春花が気持ちを自覚したのは、ハジメとヘイタが遊びに行くプランについてかなりどうでもいいことでヒートアップしてしまい、それを僕まで切れて止めた時だそうです。僕はそんなことがあったことすら忘れていましたが、春花の中では普段おとなしい僕は、こういう状況で人を叱れる意外と強い男の子なんだと書き換えられた出来事として忘れられないそうです。人生何がきっかけになるかわからないですね。
とにかく、それが僕と春花が付き合うきっかけです。今でも週末とは別に、春花は時間が空いたら僕の部屋に来て、一緒に過ごしています。

「ありがとうございましたー」
さて、ようやくお客さんが途切れてきました。もう一踏ん張りで目処がつきそうです。
ピンポーン。
…本当に今日はお客さんが途切れない日です。
「ヒロ、お疲れさん」
「ハジメッ」
「…こういう時は、本名で呼ぶなって」
「あっ、ごめん」
ハジメの隣には、綺麗に髪をセットした女の人が仲良さそうにハジメに腕を絡ませています。高いヒールを履いているからか、僕より目線が上なのがちょっと悔しいですけど。
「ヒカルぅ。この子、誰ぇ？」

女の人は相当酔っ払っているようです。顔も真っ赤で息も酒臭い。
「俺のしんゆー。ほら、あまりふらふらしてると他の人に迷惑だからすぐ行くぞ」
そう言うと、『ヒカル』は女の人に軽くキスをしました。女の人の方は、ご満悦と言った表情です。
「本当、人の前でよくやるよ。『ヒカル』は」
僕は溜息をつくと、言いながらハジメが愛煙している煙草を棚から取りました。パーラメントのロング。煙草をコロコロ変えるやつは浮気者なんだと、高校の時からこれ一筋です。…そのくせ、今ホストなんてやってますけど。
「ヒロには負けるよ。俺らの前で毎回チュッチュしてるくせに」
「…うるさいよ。あれは春花からしてくるんだもん」
「はいはい。じゃあそろそろ行くわ。こいつ、寝そうだし。明日楽しみにしてるよ」
「うん。気をつけて」
「正直、ミーティングに出た方がまだ楽だったよ」
『ヒカル』じゃなくて『ハジメ』が女の人を指差し僕に耳打ちすると、僕は苦笑して二人を送り出しました。

さて、ハジメに会って気合入ったし、仕事に取り掛かりますか。明日は金曜日、皆に会うのが楽しみです。

「いらっしゃいませ、こんばんわー」

あるコンビニ店員の話（後書き）

白カカオです。博文が私の現状と被っているという指摘があるかもしれませんが、私とは全く違う人種です。私は一切こんな爽やかな青春送ってません。なんか、泣きそう…。自分の作品にめげずに頑張ります。ご意見ご感想いただけたら幸いです。

とある週末の過ごし方（前書き）

こんにちわ、白カカオです。今日は会社で暇を貰って家にいます。
いやぁ…親父の会社で働いてると、楽。では、今回のお話どうぞ。

とある週末の過ごし方

「ヒロっ。烏賊取って烏賊、あと焼酎も」
「ヒロを使わないで。自分でとりなさいよ」
今、いつもの四人で飲み会の真っ最中です。僕はシフトに休みを入れてもらい、春花とヘイタは仕事帰り真直ぐ僕の部屋に。ハジメは…残念ながらこの後仕事だそうです。ハジメの職場には、僕のアパートから徒歩十分といったところですが…いつもタクシーを呼んでいます。なんでも、出勤しているところを誰に見られるかわからないから…だそうですが、僕にはそれのどこが拙いのかさっぱりわかりません。ホストの世界にも色々あるようです。
春花とヘイタは僕の部屋に着替えを置いていっているので、今はスーツを脱いでくつろいでいます。ヘイタは市役所の公務員さん、春花はウエディングプランナーで事務所で働いています。スーツが似合う仕事って、格好いいですよね。
「おぉこわ。恐妻を持つと大変だな、ヒロ」
「ヒロには優しくしてるもん」
微妙に矛先が僕に向かっているようですが、向かいに座っているヘイタと顔を見合わせ、苦笑で乗り切ることにします。この二人のやりとりは、遠くで傍観してるくらいが一番ちょうどいいんです。
「それよりハジメ、ここでそんなに酔っ払っていいの？」
ハジメがさっきのくだりで作った焼酎をもう飲みきり、ビールに手を出しています。
「いいのいいの。俺は酒入ってから仕事でた方が、トークが軽快に弾むから」
「アンタのは空回りじゃないの？空気読めないし」
「馬鹿、お前とヒロがしたそうな空気出してるときはお暇するだろ」
「いっ、いっうちがそんな空気出したのよ」
春花が顔を真っ赤にしていますが、僕は助け舟は出しません。春

花が酔っ払うと、所構わずキスしてくるのは事実だし。
「ハジメだって、昨日僕のとこでレジ前でキスしてたじゃん」
やっぱり何も言わないのは春花が可哀想なので、一言ネタを言っておいてあげます。
「アレは仕事だっつうの。俺だってしたくてしてるわけじゃないの」
世の中の男が聞いたら全員敵に回しそうなことを、平気で言っちゃいます。あんな美人、したい人五万といるでしょうに。
「枕ホスト」
「うるさい。俺は客のニーズに応える、立派な仕事してるの。それに人前で平気でチュッチュするのはお前の方が酷いぞ」
「…春花には悪いが、それは俺も同意だな」
ヘイタが苦笑しながら追い討ちをかけます。この後の展開は、もう大体お約束のようなものなのですが…。
「えーんヒロぉ。二人が虐めるー」
やっぱり、春花は泣き真似して僕に甘えてきます。よしよしと頭を撫でてあげると、嬉しそうに僕を見上げ、キスしてきます。全く、いつも通りの流れです。
「…そういうことするから、言われるんだと思うよ？」
「でも無理ー」
胡坐をかいて座る僕の膝に、頭を乗せて膝枕の状態になる春花。僕はもう苦笑するしかありません。
「てゆーか、二人とも確信犯でしょ、ねぇ？」
僕が抗議の眼差しを向けても、二人は無視してつまみに手をつけます。なんなんでしょうか、この仕打ち。
いきなり、ハジメの電話から着信をつげる音楽が流れます。
「はい、お疲れ様です…えぇー新規？俺今日は大事な用で出勤ずらしてもらったんですけど…いえ、大丈夫です。俺はいいです。あっ、俺の客来たら連絡ください。そしたら行くんで」
そう言って、溜息をついてハジメは電話を切ります。
「いいのか？新しいお客さんゲットするチャンスじゃねぇの？」

顔を既に真っ赤にしている、ヘイタが言いました。ヘイタはあまりお酒が強くないので、たぶんあと少しすれば潰れて寝てしまうと思います。その割りにいつもペースが速いので、困ったものです。

「割引キャンペーンしてるときに来る客なんて、細いのばっかだし。そういうのは、まだ売り上げない下の子にあげるさ」

ちなみに、細いとはあまりお金を使わないお客さんを指す言葉だそうです。ハジメに教えられ、そっちの世界の用語も少し覚えてしまいました。ハジメはお店の売り上げでナンバーツーをずっとキープしているそうです。ハジメが働いているお店は、立川では名前が通ったお店らしいので、街を歩いていると結構振り向かれる程有名人なんだとか。

「だからあんたはナンバーワンになれないのよ」

春花が膝枕の姿勢のまま口撃します。そろそろ、足が痺れてきたのは我慢することにします。

「俺は無駄球打たないでここまで来たの。このスタイルを変えるつもりはねぇ。好球必打ってやつさ」

「…そこで打つとか使わないでよ」

打つとは、枕する。つまりお客さんと寝ることです。ハジメ曰く、じらしてじらして、タイミングを見て打つのが売れる人間のする手法だそうですが、僕にはさっぱりわかりません。ホストの世界は難しいです。

「なぁヘイタ。お前ならわかるだろ？」

ハジメが話をヘイタに振りますが、いつのまにか丸まって寝てしまったようです。別に話に入れずにつまらないとかではなく、お酒が入ると睡魔に勝てないんだそうです。介抱する僕としては、随分楽な相手でいいのですが。

「…今日はまた一段と早くないか？寝るの」

ハジメが呆れたように溜息をつきます。

「疲れてるみたいよ？ヘイタ。市役所がお引越しするとかで、バタバタしてるんだって」

「へぇ…大変なんだな。じゃ、そろそろ俺も出勤するわ」
そういうと、ハジメが掛けてあるジャケットに手をかけます。キラキラした光沢を放った生地に、胸元にコサージュという、花を模したブローチをつけています。
「えっ？もう行っちゃうの？」
「あぁ。ヘイタ寝ちゃったし、お前の膝の上にいるペットがそろそろ発情しそうな頃合いだからな」
「しないわよ。別に気を使わなくていいから、ゆっくりしていきなよ。別に遠慮するような間柄じゃないでしょ、うちら」
春花がそういいますが、姿勢は一向に直そうとしません。
「別に遠慮なんかじゃねぇよ。空気読むのも、良いホストの条件さ。あっあと、来週は久しぶりにカラオケ行こうぜ？ちゃんと休み取るからよ」
「取れるといいけどね。ヘイタにも言っておくよ」
「おぅ。じゃ、いってきます」
「いってらっしゃい。気をつけて。仕事、頑張ってね」
僕らが手を振り、ハジメを送り出します。ニッと笑って、ハジメが出て行きました。

「ハジメ、行っちゃったね」
僕が春花に話しかけると、春花が僕の顔を見上げてニヤニヤしています。
「なに？」
僕が呆れ笑いながら、春花の顔を撫でます。上気して目がとろんとしている春花。もぞもぞと這い上がって、僕に抱きついてきます。
「えっちょっと。ヘイタいんじゃん」
「軟弱者は深い眠りについてるから大丈夫。今は…二人だけ」
「しょうがないなぁ…」
こうなると、春花は強情なので僕が折れるしかありません。たぶ

ん外では絶対見せないような姿です。
「んっ…」
またも唇を奪われ、なすがままの僕。…舌は、自粛しましたが。
寝てるとはいえ、ヘイタに悪いし。
「ねぇ、ヒロ…」
「全く…ハジメとヘイタに言われたこと、全然省みてないじゃん」
「ぷっ…かもね。ホテル、行こ？」
「またそうやって無駄遣いして。知ってる？僕今お金貯めてるって」
僕は今、少ない生活費をさらに削って、ある目的の為に貯金してるんです。目的は、春花には内緒で。
「大丈夫、うちが出すから」
「…そう言って、いっつも僕がお金出してるじゃん」
そう言いながらも、半ば覚悟するしかないようです。こうなったら、春花は言う事を聞かないので。しょうがなく、丸まっているヘイタに毛布をかけてあげます。
「カラオケ、楽しみだね」
毛布をかけながら、春花に話しかけます。三人とも歌が上手いので、僕はほとんど鑑賞して楽しんでいます。好きなんです、上手い人の歌聴くの。決して、僕が歌うの恥ずかしいからじゃないですよ？
「ねー。なに歌おっかなぁ。ヒロ、何聴きたい？」
「うーん…考えとく。当日にいきなり振るからヨロシク」
僕がいたずらっぽく笑うと、春花が頬を膨らませます。
「言っとくけど、うちアニソンは歌えないからね？」
「アハハ。わかってるよ」
ちょっと出かけると書置きして春花に手を差し出すと、子供のように手を繋いできました。こういう子供っぽいところも、愛らしくて可愛いと思うのですが、どうでしょうか？玄関を出る前にもう一度、今度は僕の方からキスすると、満面の笑みを向けてくれます。
僕の貯金の目的は、結婚資金。すぐには無理でも、働き口を探して、立派な社会人として春花を迎える計画を立てています。隠して

いますが、実は求人誌とか最近目を通してみたり。
そんな僕の計画を知るはずもなく、春花は僕の手を引っ張って行きます。…その後姿を見ていると、なんだか僕も今を楽しもうという気持ちになってしまいますから、困ったものです。

とある週末の過ごし方（後書き）

すみません、バイト前なので急ピッチで書き上げました。誤字とかあったら指摘していただけると助かります。

side Hajime part1（前書き）

お久しぶりです、白カカオです。今回から、毎週日曜日にこちらを投稿することにしました。時間がある時と延ばしていると、絶対に進まないことに気づいたので。それでは、間隔空きましたがどうぞ。

side Hajime part1

ヒロは何年もの付き合いになる、俺の親友だ。特別俺が派手めに映るから、地味ではないがあまり目立つ方ではないヒロとの組み合わせは結構意外に思われるらしい。自分でも思うが、本当に正反対な二人だ。ただ、ヒロとは不思議とウマが合う。何をしているわけでもない、隣にいるだけの沈黙もヒロとなら苦痛にならない。そんな人間は貴重だ。特に、いつも騒々しくして馬鹿やっている俺みたいな人間には、数少ない癒しの存在だ。恥ずかしい言い方をすると、かけがえのない親友だと言っていい。

「ハジメ、俺さ、春花と付き合うことになった」

高二の冬、ヒロが恥ずかしそうにそう告白してきたときは、自分以上に嬉しかった。はっきり言って、俺はモテる方だ。自分で言ってはなんだが、派手なナリにクラスでも目立つ方だからわからなくもない。身も蓋もない言い方をすれば、俺はその気になればいつでも相手を作ることは出来る。ただ、そういう女は大抵俺の外見にばかり比重を置きすぎて、俺が意にそぐわない言動をすればあっさり掌を返すようなやつが大半だ。

ヒロだって顔は悪くない。寧ろ童顔でそういう顔がタイプの女も少なくはないだろう。ヒロが損をしているところは、その引っ込み思案なところだ。優しすぎて、自分の事よりも周りの事を優先させてしまう。当然誰かを蹴落としても自分が前に出るようなことはしないから、ただのいい人で終わるパターンがほとんどだ。そしてこれはヒロ本人も言っていたことだが、感受性が強すぎて何をするにもどうしても尻込みしてしまうところがある。

「まぁ、本当はただチキンなだけなんだけどね」

ヒロはそう言って笑っていたが、俺にはない物を持っているヒロを、俺は羨ましく思っていた。俺は、道端でお年寄りや子供に優しく手を差し伸べるヒロを知っている。そして、本当に相手を慈しん

でいるその瞳も。それは、俺には持ち得ないものだ。
だから、同じグループの春花がヒロに告白したことは、色々な意味で嬉しかった。一つはその相手が春花であること。もう一つは、春花がきちんとヒロの内面に惚れてくれたこと。いつでも損な役回りが多いヒロのことを、ちゃんと理解してくれた相手が春花だったことが凄く嬉しかった。その日の晩、実家のスナックの酒を持ち出して一人酒盛りをした位だ。次の日お袋にバレて、登校する直前まで怒られる羽目になったが。その二人は現在進行形で仲睦まじく交際を続けている。最近のマイブームは、ヒロに未だにべたべたな春花をいじり倒してやることだ。ホストを始めて口がさらに達者になった俺に打ち負かされた春花が、ヒロに助けを求めている様が微笑ましくて最高に楽しい。

そういえば、一度ヒロにうちのクラブの手伝いをして貰ったことがあった。去年の秋、うちの系列グループの二周年イベントが赤坂のホテルのフロアを貸しきってやることになったのだが、スタッフの人数が足りなくてその日限りのアルバイトを募集していたのだ。
「ヒロ、頼む。スタッフが足りなくて困ってるんだ。ここは俺を助けると思って、頼む」
親友の俺に手を合わせて頼まれたら拒否できない事を知っていたので、悪い事をしたかなとは思っていた。しかし、困っていたのは本当だ。ちょうど売り上げのナンバーに入り始めた俺は、その沽券に懸けて失敗するわけにはいかなかった。それに俺とヒロのコンビネーションは抜群だ。二人なら絶対客を満足させられる自信があった。
「うーん…今回だけだよ？あと、お客さんを騙したりとか嫌だからね？それと…」
「春花には勿論内緒にする。騙しもさせない。ヒロは来てくれるだけでいい。最低限のテーブルマナーとかは俺が教えてやるから」
心の中でガッツポーズをすると、簡単にテーブルマナーを指南し

てやった。その後努力家のヒロは家で練習していたのだが、運悪く春花にその現場を見られてしまって、二人で正座させられて説教されることになったが。ちなみにその時ヘイタは、春花の後ろで大声出して腹抱えて笑っていた。

当日は、贔屓目無くヒロのおかげで俺の客の評価は上々だった。俺が買ってやったスーツ姿のヒロは、馬子にも衣装という言葉がふさわしい出来栄えだった。実はそのスーツはこっそり新宿の馴染みの店で、ヒロに合わせて仕立てて貰った物だ。本当の事を言ったら、絶対ヒロは遠慮して着ないか後でお金を渡してくるだろうから、店の貸しスーツという体にしていた。ヒロの影の努力も実り、後日支配人にヒロを店に入れてくれないかと頼まれた程堂に入っていた。

「あの後、春花本当に大変だったんだから。色んな意味で」

イベントの次の週の飲み会で、ヒロにそう言われた時は失笑ものだった。結局一番楽しんだのは、渋々許可を出した春花だった。ヒロ、そう言えばあの時痩せてたな。まぁ春花のやきもちも当然だから仕方ないのかもしれない。

「ヒカルさん、三番テーブルのミナミちゃんが呼んでますよ」

「あぁ、今行く」

今俺は、この店に勤めて二年と半年になる。きっかけは、ただのスカウトだった。お袋がスナックを経営していて水商売に抵抗が無く、その時フリーターでフラフラしていたこともありただ気分で着いて行っただけなのだが、俺は見事に嵌まってしまった。その煌びやかな世界に魅了され、俺はこの世界で生きていく事に決めた。少なくとも、若くて商品価値がある内は。そして今では立川市のトップブランドであるこの店で働いているという事は、誇りですらあった。

「なになに？俺がそんなに待ち遠しかった？」

この空間でなければ白い目でみられそうな台詞を平気で言う。ここはそういう物言いが許される場で、許される相手なのだ。
「だってヒカル、全然構ってくれないんだもん」
「そう言うなって。俺も忙しいんだよ」
「他にお客さんでも来てるの？」
ミナミが値踏みするようにこちらを見る。女の武器を平気でさらけ出すような女が嫌いな俺は、はっきり言って苦手なタイプの相手だった。水商売では自分の客が来ないことを「お茶」と言うが、俺にとってミナミは、お茶対策と締め日のシャンパン要員でしかなかった。
「いや？今日はお前だけだよ」
「じゃあ今日はアフターも付き合ってくれる？」
アフターとは営業が終わってからもその客といること。つまり、時間外労働だ。必要があればするが、今日そんなことしなくてもこの客はまた来る。今日アフターをすることは、俺にとって時間の無駄でしかない。
「悪い。今日はこの後撮影なんだ」
「そ、そうなんですよ。ヒカルさん来月のメンズ・エアに載るんですよ」
俺の意を汲んで、ヘルプについてついてくれているショウが話を合わせる。ヘルプの仕事は表向きは客を楽しませること。しかし実際は酒を消費すること、ひいては自分の心証が悪くなっても、その客が指名したホストの利益になる事を遂行すること。その点に関しては、ショウは信頼出来るヘルプだった。俺がメンズ・エアというホスト雑誌の全国紙のグラビアに載ることは間違いないのだが、その撮影は既に終わってある。
「マジで？絶対買うっ」
「おう。だから今日は無理」
「じゃあミナミさん、ヒカルさんの撮影の気合入れる為に、前祝いでシャンパン飲みませんか？」

「えー？ショウ君またそうやって煽るんだからー」
ミナミの肩に回した手で、ミナミに見えないように出したサインに、ショウは気づいてくれたようだ。こいつは本当に使えるやつだ。今度飯でも奢ってやろう。
「なぁミナミ。俺もシャンパン入れてくれたら頑張れるんだけど。それに、お前がシャンパン入れてくれることで俺はまたナンバーに入れるんだぜ？」
ここで調子いいことを言えば、この女は絶対に落ちる。その後は、適当にのらくらかわしていても支障はない。
「でも私、今日あまりお金持って来てないよ？」
「最悪、売り掛けでもいいよ。お前のこと信じてるからこう言ってるんだぜ」
そう言って、ミナミの体をこちらに抱き寄せ密着させる。
「あっ…」
ミナミの目がとろんとするのが分かった。好きな男に信じてると言われて、何も思わない女はいない。シャンパンを煽られている立場から、この人の信頼に応えたいという考えにシフトさせる。単純に議論のすり替えなのだが、アルコールが入っている上にこんな特殊な空間で、気づく女は意外と少ない。
「じゃあ…」
「アスティーでいいからさ」
アスティーとは、うちの店でシャンパンコールをする一番安い値段のシャンパンだ。ミナミの収入で店に通わせつつ締め日にもう一度シャンパンを入れさせ、尚且つ売り掛け金を回収出来る額を考えると、妥当なラインだ。反対側のテーブルには俺と今の所ナンバー争いをしている、先輩のキョウイチさんがいる。シャンパンコールが入れば向こうの刺激にもなるし、それは店の活性化に繋がる。このバチバチ火花を散らす感じが、堪らなく好きだった。
「わかった。じゃあ今度アフター付き合ってね？」
ミナミが上目遣いで俺を見上げる。この女は色恋を目当てにここ

に来ている。焦らしつつタイミングを見て抱いてやれば俺から離れることもないだろう。そろそろ、ミナミの仕事先も次のステップに進めるかもしれない。結果オーライな展開だ。ヒロがこの場にいれば顔をしかめるだろうなと思うと、失笑が漏れる。

「わかった、約束するよ。じゃあ支配人に言ってくるよ」

ミナミの頭をポンと叩き、俺は事務所に入った。途端、外でサイレンが聞こえる。

「近いっすね。なんかあったんですかね？」

「さぁな。で、どうした？」

支配人が、煙草を吸いながら売上表を眺めている。俺は今どこに位置しているんだろうか。

「あっ、俺のとこでアスティー入ります」

「わかった。じゃあマイクと音楽の準備しておく。まだわからないけど、これでキョウイチを一万円差でギリギリ抜くな」

今日までの売り上げで負けていたのか。しかし今月もナンバーは維持しないといけない。少し、無理しないといけないかもしれない。

「了解っす」

そう言って俺はまた席に戻った。それにしても、さっきのサイレンが気になる。あれは救急車の音だった。後で、ヒロにでも聞いてみよう。

俺がその連絡を受けたのは、まだ夜が明ける前だった。結局もう一本アスティーを空けた俺は、結構酔っ払っていた。タクシーに乗ると吐いてしまう恐れがあったから、俺は少し時間がかかるが酔い覚ましもかねて歩いて帰ることにした。最悪、俺の家より若干近いヒロの家に泊まればいいやと考えていた。唐突に、携帯の着信音が鳴る。客なら無視しようかとか思って溜息をつきながら確認すると、相手は春花だった。

「おーどうした？こんな夜中に」
ふらふらしながら、相手が気心が知れた春花だとわかると機嫌良く答える。
「ハジメ…ハジメ…」
「どうしたー？ヒロと喧嘩でもしたかー？ったくお前らはなー」
「…じゃった…」
「うん？なんだよはっきり言えって」
「死んじゃったよ…ヒロ…」
「死んだってヒロがかー。へー、あのヒロがねー。…今なんて言った？」
酔いと同時に、血の気が一気に引くのがわかった。夏前のはずなのに、俺の周りの気温が一気に氷点下に下がったような寒気が襲った。

side Hajime part1（後書き）

さて、本題に入りました。私的には、書いてて色んな感情が入ってしまってなんとなく苦しい話です。つうか、基本的に重いです、この作品。それでもよろしければ、ご愛読いただけると嬉しいです。ではまた、来週の日曜日（月曜日？）にお会いしましょう。

side Hajime part2（前書き）

こんばんわ、白カカオです。少しアクシデントがあり更新が遅れました。もっと早くお見せできる予定だったんですが…。

side Hajime part2

次の日、総合病院の霊安室に「ヒロを除いた」いつもの面子で向かった。そこに先に来ていたヒロは、顔に白い布が掛かっていた。
「ヒロ…本当に死んでるんだよな…」
思わずそんな馬鹿げた事を聞かなくてはいけない位、ヒロの寝顔は綺麗だった。
「あぁ…もう…ヒロは動かねぇんだよ、ハジメ…俺もまだ信じられねぇけど…」
ヘイタが言葉に詰まりながら、俺のしょうもない質問に律儀に答えてくれる。その声は、ヘイタの物とは思えない位掠れていたが。
聞いた話によると、ヒロの死因は頭蓋骨骨折による脳挫傷だった。バイト中に酔っ払いに絡まれたヒロは、他の客や同じく入っていたバイトの女の子の迷惑にならないように外に出たそうだ。そして口論の末、その酔っ払いは車道側にヒロを突き飛ばし、運悪くそこに大型トラックが突っ込んできたらしい。その酔っ払いは何かを喚き散らした後逃げ出したが、すぐに逮捕されたと言う話だ。
「ったく、ヒロらしいよ…」
そう零した言葉は誰の反応を待つでもなくひんやりした空間に消えていった。腐敗防止の為か強風にかけられたクーラーの音だけが、やけに耳障りだった。
春花は、一言も口をきかなかった。

「ヒカルぅ？ちょっと今日暗くない？」
意識はなくても、人は惰性で職場に辿り着けるらしい。今日は客を呼ぶ気がない俺は、キョウイチさんのヘルプについている。仕事に私情を持ち込みたくないから、表面上だけでもピエロを演じれる

ように努める。しかしキョウイチさんのお客さん、ミレイさんの言葉から察すると、それもどうやらボロボロだったらしい。
「そんなことないッスよー。アレやりましょうよ、いつものアレ」
ミレイさんが来ると、毎回やっていたゲームを提案する。とりあえず、これならミレイさんも喜んでくれるだろう。
「おいヒカル、それは今さっきやっただろ。酔っ払ってんのか？」
キョウイチさんが笑いながら助け舟を出してくれる。が、あの目だけ笑っていない表情は、確実に逆鱗に触れた時の表情だ。
『担当に迷惑を掛けるヘルプは、いない方がましだ』
キョウイチさんがミーティングの度に口酸っぱく言っている言葉だ。俺もそう思う。そして今日の俺の出来は最低だ。
「まだまだ全然余裕ッスよ。でもちょっと失礼しますね」
おどけながら席を立つ。キョウイチさんのテーブルには、もう一人ヘルプがいるから大丈夫だろう。トイレに入り、気持ち悪くも無いのに酒を吐き出す。吐く時に喉を切ってしまったのか多少血が混じっていた気がするが、そんなことはどうでもいい。周りの声が全く頭に入ってこない。何があったのかすら記憶に残らない。ヒロが死んだということが、理解出来ない。
「おい、ヒカル。いるんだろ？ちょっと出て来いよ」
乱暴に扉を叩く音が聞こえる。案の定、キョウイチさんが切れているらしい。力なく扉を開けると、いきなり胸倉を掴まれた。
「おい、お前寝ぼけてんのか？それともナンバー常連に入って日和ってんのか？」
俺の鼻先で、キョウイチさんが静かに恫喝する。この人は決して感情に任せて怒鳴り散らしたりしない。ただ、何年ものキャリアからの威圧感だけでびびるに値するのだが、それすら頭に入ってこない。
「お前、営業前にミレイが来るから着けって言ったら、了承したよな？なんだあの腑抜けたザマは。ミレイも久しぶりにお前がヘルプつくって喜んでたんだぞ？」

あぁ、それは悪いことしたなと、キョウイチさんの眉間の皺を見ながらぼんやり考えていた。
「…もういい。お前は外すから一旦席に戻れ」
俺を突き飛ばすと、キョウイチさんはテーブルに戻っていた。普段の俺なら逆に切れ返すところなのだが、そんな気力は今はない。力なくテーブルに戻ると、間もなく俺を外す声が背後からかかった。

「どうしたの？珍しいじゃない、ヒカルが店に私を呼ぶなんて」
仕事にならない、しかし店にはいなければいけない。そんな状況で、俺は苦渋の決断として普段は店に来させず、店を介せずに金を直接貰う、通称裏っ引きとして使っているヤヨイを店に呼んだ。この女は隣に俺がいるだけで満足してくれる、実に使い勝手のいい女だ。だからこそ、こういうときに呼んだのだが。
「別に…なんでもねぇよ。とりあえず、ビール五セット」
「ホント…何かあった？」
「うるせぇよ。今日はただ飲みたい気分なんだよ」
「普段はビールなんか飲まないくせに…」
「あっ？」
「ごめんなさい…」
ボーイが、瓶ビールの小瓶を十本、五セット分運んでくる。テーブルの上はそれだけで埋め尽くされた。
「…お前は、ショウと話してろよ」
ショウは俺の変化に気づいているのか、ヤヨイと二人で盛り上がれるよう上手く話を持っていってくれる。
そういえば、ヤヨイもあの時ヒロについて貰ったんだな…。
例の周年イベントの時…右も左もわからないヒロに一番最初につけさせたのが、ヤヨイだった。俺の親友だからというだけで、無条

件でヒロに手ほどきしていたヤヨイを、隣で眺めていたのを今でも覚えている。今目の前にいるショウ程上手くないが、一所懸命にヤヨイと会話するヒロに、ヤヨイも好感を持ってくれていた。しかし、今目の前にいるのはヒロではない。ヒロは、目の前どころかこの世から居なくなってしまった…。

「ビール、もう三セット追加」

涙目になりそうなのを煙草の煙で誤魔化し、更にビールを追加した。そしていつの間にか、視界が暗転していった。

「…さん、ヒカルさん」

暗い世界で、俺を呼ぶ声がした。

「おい、ヒカル」

別の声ではっきりそう聞こえると、いきなり水をかけられた。

「ちょっと、キョウイチさん？落ち着いてください」

「うるせぇ。ムカつくんだよ。この幸せに寝てるこの馬鹿がよぉ」

頭の傍で、ショウとキョウイチさんの言い争う声が聞こえる。俺は、いつの間にか横になっていたようだ。

「ショウ、キョウイチさん…すみません、今何時っスか？」

上手く回らない頭を上げると、店の中は煌びやかな照明を落とし薄暗くなっていた。

「二時前だ。営業時間中に三時間も寝やがってこの馬鹿野郎が」

キョウイチさんは、少し落ち着いたのかさっきまでの棘が無くなっていた。

「キョウイチさん…さっきは、ホントすみません。ミレイさんにも、今度謝らせてください…」

「そのことは何とかなったからいいんだよ。何か、あったか？」

今度は、諭すように俺に話しかける。

「すみません…私情なんで、大丈夫っス…」

「馬鹿野郎。どんだけお前の世話見てきたと思ってんだ。お前は、俺が信頼出来るまで育て上げたホストだ。そのお前が、あんななるなんてよっぽどのことだろ？話せ。ショウ、ちょっと席外してくれるか？」
「あっ、はい…」
尊敬して、憧れてきて、やっと肩を並べれる存在になったキョウイチさんの言葉に、不覚にも涙が出そうになる。まだ酒が残っているのか、情緒不安定になっているのかもしれない。
「あっ、いいっスよ。ショウも、俺の可愛い後輩っスから」
「ヒカルさん…俺も、話を聞くこと位は出来るっスから…」
「実は、昨日…昨日…」
嗚咽で声が喉に詰まり、上手く外に出てきてくれない。ショウの腕時計の秒針の音が、音楽を切った店内に響く。
「親友が…親友が、事故で…死んっ…死んだんス…」
二人が、黙って俺の独白を聞いてくれる。言葉に出し、自覚してしまった事実に、堰を切ったように限界を超えた思いが次々と吐き出されていく。
「親友だったんス…ずっと、ずっと、一緒にいて…そのヒロが…昨日…」
「ヒロって、去年イベントに連れて来たヒロさんッスか？」
「あぁ、あのちっこい子か。お前のあんなガキみたいな笑い顔、初めてみたから覚えてるよ」
「あっ…あぁ…」
嬉しかった。俺達の他にも、俺がつけたダサい仲良しグループの名前、チーム「H」の他にも、ヒロの事を覚えていてくれたことが嬉しかった。勿論ヒロの職場の人とか親戚の人とかも覚えているだろうが、俺の世界にもヒロを覚えていてくれた人がいたことが嬉しかった。ヒロがこの世界にいたことの証明になるようで、嬉しかった。ただ、そのヒロがもういないことだけが悲しかった。
「先週だって…あいつの部屋で一緒に飲んで…でも、もうあいつの

声が二度と聞けなくて…もう、あいつの笑ってる顔が見れないなんて…ヒロと、もう会えないなんて…こんな…こんな話…」

もう、声を出して泣いていた。言葉にならない想いが、でも涙になって止まらなくて、俺はただただ子供のように大声を上げて泣いていた。

side Hajime part2（後書き）

書いている途中に、昔を思い出してちょっと私も涙が出てきた今日この頃です。まぁ皆さんの予想通りのアレだと思いますが。あと、ホストの世界って誤解されがちですが、意外と仲間意識は強いです。たしかに悪いイメージ通りのクラブも少なくありませんが、いいお店もちゃんとあります。もしかしたら、仕事の辛さ共有してきたからこその連帯感かもしれませんが。これを読んでいただいている方の、水商売に対する偏見が、少しでも緩和されたらいいなとかちょっと考えちゃってます。では、また来週。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8355t/

チーム「Ｈ」

2011年6月27日01時11分発行